

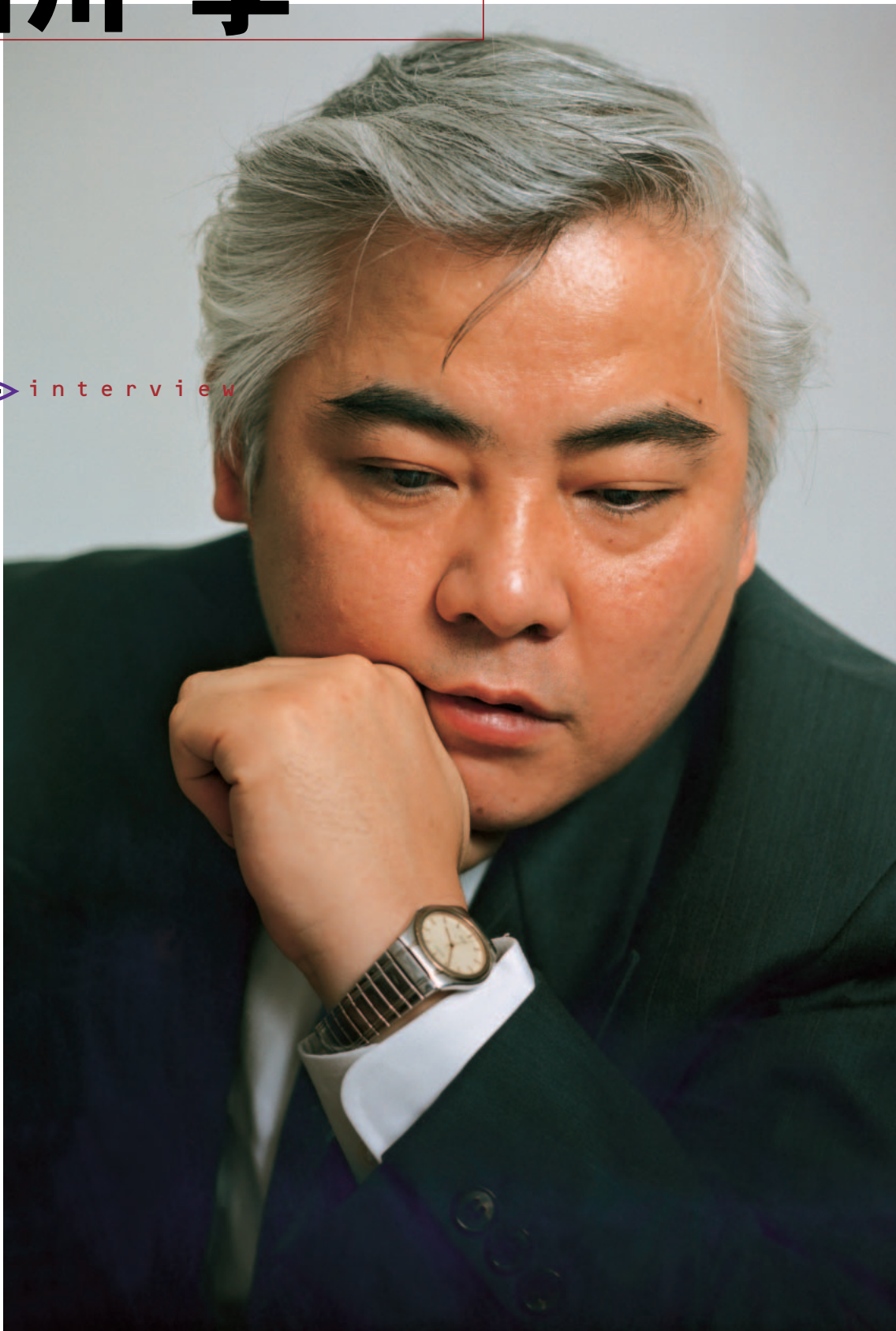
マイクロソフト株式会社 代表取締役会長

Furukawa Susumu

# 古川 享



interview



ワイヤレスという通信形態が広がっていく中で、やはりどうしても避けては通れない企業がある。マイクロソフトである。最近では、NTTドコモとの合併会社『モビマジック』やエリクソンとの提携、また、携帯電話向けのインターネットアクセスソフトの「モバイルエクスプローラ」の開発など携帯電話というワイヤレス分野への進出が目立つ。さらに、東京電力、ソフトバンクと組んでFWAなどを使った高速なインターネット接続サービスを提供する『スピードネット』にも出資している。そこで、マイクロソフト株式会社代表取締役会長の古川 享氏に「ワイヤレス」が作る未来について伺った。

聞き手: インターネットマガジン編集部  
Photo: Watari Tokuhiko

☎: 「ワイヤレス」のネットワークが広がり始めています。ワイヤレスで機器がつながることについて、マイクロソフトとして、もしくは古川会長ご自身としては、こういった状況をごどのようにご覧になっていますか。

古川: 私たちは、単独のデジタル機器の中で閉じた世界を作るのではなく、デジタル機器同士が互いにやり取りするときのデータの標準化やプロトコルの標準化によって生まれる可能性の広がりや、情報機器がパソコンのコンパニオンデバイスとして果たす役割についていつも考えています。

得てして犯しがちないわゆる「デジタル化」というのは、閉じた世界の中で機器をデジタル化してしまっ、他の機器とは接続ができないものになっています。残念なことにメディアを変換するために、あとから別の機械に差し込んで変換しなければならないことがしょっちゅうあります。また、本来ならばリアルタイムで機器同士がつながっていても当然なのに、接続方法がないために、機器の中にある情報を1回ローカルストレージに転送して、変換してからもう1回アップロードしなければならない場面も現実として多いのです。

ところが「Bluetooth」もそうですが、複数の機器がシームレスにつながって互いに役立つことをプッシュしてくれたり、機器が組み合わさることで新しい可能性が広がったりすることが考えられます。単に、単一の機器がワイヤレス機能を持つことでモバイル化しただけではなく、「つながる」ことで、別々に存在している2つの機器が持つ価値以上のものが生まれるところに興味を抱いています。

☎: エリクソンとの提携やNTTドコモとの合併会社『モビマジック』の設立など、ワイヤレス、特に携帯電話を中心とした分野での提携が多いようですが、マイクロソフトとして提供できるものには、こういったことがあるのでしょうか。

古川: 『モビマジック』が目指すところは、端末としてのiモード端末を使って「ホームページにアクセスできる」とか「ゲームができる」といったiモード専用のサービスを超えて、企業の中で必要とされるモバイル環境をエンドツーエンドのソリューションとして提供することにあります。つまり、iモード端末(クライアント)の機能を増してどこかにあるサーバーにアクセスするのではなく、社内で絶えず更新されている情報にアクセスすることに価値が生まれます。

たとえば、取引先で役員のスケジュールを押さえたいときに、今のところ「社に連絡してみます」と言って電話するしかないわけです。ところが、これから先の端末を使えば、役員のスケジュールを押さえたいときに、端末を使って社内の情報にアクセスしてスケジュールを確認できるわけです。しかも、アクセス権限によってどこまで情報が見られるかという制限もかけられます。

また、グループ全体で進めている仕事では、誰かのスケジュールを仮押さえして、その人から一定時間内に返事がなかったら、自動的にスケジュールを押さえられる仕組みにしておくこともできます。こういうことは、Exchangeサーバーで簡単に実現できます。

ほかにも「今、在庫が何個あるんですか?」「この商品はどこまで値段が下げられるんですか?」といった質問に、今まで

ワイヤレスが作る「モバイル環境」は  
生きた情報をオフィスの外に  
いつでも連れ出せるところに可能性がある。

は異なった通信方法で時間差を持って回答してきましたが、リアルタイムに情報を捕捉できれば、商売のスピード感も変わってくるでしょう。

このように、全員がコアメンバーとして重要な案件のステータスやスケジュールを確認できるだけで、きっと世の中はずいぶ

ん変わります。つまり、「モバイル環境」というのは、通信をしたいときその一瞬だけセッションを張るのではなくて、生きた情報をオフィスの外にいつでも連れ出せるところに大きな可能性があると思っています。

☎：今おっしゃったこと以外に、iモードのような携帯電話が持つ新しい役割は考えられますか？

古川：iモード端末で情報をつかんだときに、情報を入手したホームページをもう少し見ると、より詳しい情報が見られます。このような情報の全貌が見たい場合に、iモード端末をリモコン代わりに使って、コンビニエンスストアのコピーマシンに原稿を出力できたら非常に便利だと思います。

iモード端末は情報を検索するために使う道具ですが、端末だけで情報をすべて見るのは辛いので、端末を“魔法の杖”にして、近くのパソコンを操作したり、近くのコピーマシンに印刷させたり、ホテルにチェックインして部屋のテレビに今日のニュースを出させたりできれば、より情報機器を便利に使いこなすことができます。

たとえば、Bluetoothは自分の身の回りにある機器同士が互いに通信できるので、鞆の中にあるパソコンをいちいち起動させなくても、パソコンの情報をiモード端末から読めるようになります。そうすると、iモード端末のアクセスできるサーバーとしては、インターネット上にある公開されたサーバーや、社内で情報を共有するためのサーバー、そして、自分の鞆の中にあるパソコンなど違うタイプのものがいくつも出て

きます。こうなると、iモード端末を使える範囲がぐっと広がります。パソコンしか持っていない人は、電話帳を見るためだけにパソコンを起動しなければなりません。社内のサーバーと鞆の中のパソコン、iモード端末を連携させて最新の情報で住所録を管理している人は、Bluetoothでパソコンの眠っているCPUをキックして、住所録だけを起動させて更新すればよくなります。

このように考えていくと、さまざまなものと連携できて個人情報を管理できるiモード端末は、端末そのものがクレジットカードの代わりに思っています。

☎：今までのお話から、携帯電話が進化する中で、ワイヤレス機器がよりパーソナルなものへ向かっていくように見えます。ワイヤレスの持つパーソナルな機器の可能性やこういった機器による生活の変化とはどのようなものなのでしょうか？

古川：松任谷由実さんは『卒業写真』という曲だけで、過去に50テイクも録音していると言っています。しかし、『卒業写真』だけが50曲入っているアルバムは売るのが難しいため作れないのです。ところが、これから先、たとえば、ベスト版CDに入っ



生きた情報をオフィスの  
いつでも連れ出せること

ている『卒業写真』を再生したときに、「今日の気分はメロウだ」とか「今日は元気だ」というようなボタンがあってそれを押すと、「メロウな『卒業写真』」や「元気な『卒業写真』」がネットワークから引っ張られて再生できるシステムを作ることができるのです。今までは、原音に忠実にどこまで再生できるかを考えてコンテンツを配信することや課金をすることを考えてきました。しかしこれからは、個人の気分に応じて違ったアレンジのものが聴けるという権利をネットワークを通じて持たせることで、1人1人のプライベートチャンネルが作られるかもしれません。

つまり、これからは同一のコンテンツを同時にばら撒いて、視聴率なり同じようなものがたくさん売れるという資本主義的な勝ち負けの論理から、よりプライベートな「私のために届けてくれる価値」が生まれ始めるのかもしれない。

ここで言いたいのは、単に可搬性だけではなくて、どこにいても個人のわがままに応じるというのがモバイルの本質だとすると、「もう少しお金を出すからこんな情報まで見せてほしい」だとか「今日はこんな気分なので気分に合わせて情報に加工してほしい」という状況が、仕事の上で必要とする情報や喜怒哀楽で必要とされる情報に対して付加されるようになるかもしれないということです。つまり、個人のわがままにフレキシブルに対応できることにモバイルとしての価値が生まれるのだと思います。

☎：ワイヤレス機器の特徴は、どこにでも持ち歩いてネットワークにつながれることにあります。最近注目されているのは、GPSと組み合わせることで、外出先の位置情報とネットワーク上の情報を組み合わせることで、最適な情報を取得できるという使い方です。古川会長ご自身、位置情報を使ったワイヤレス機器の使い方にはどのようなアイデアをお持ちですか？

古川：位置情報を受け取れることによって、現在、皆さんが考えているのは、浮気の調査だとか営業マンがどこで仕事をやっているかという労働評価の問題ばかりですが、



urukawa Susumu  
古川 享



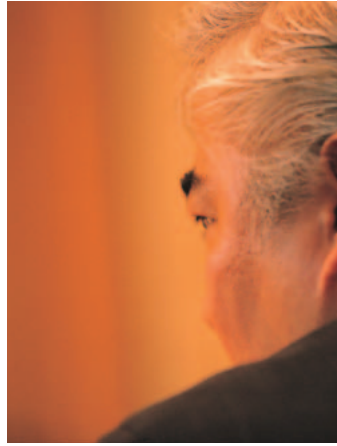
馬鹿げたものにこの機能を付けても採算がとれるような状態になったときに面白いことが起きると思います。たとえば、今でも熊だとかキタキツネの生活圏がどれくらいの広さなのかということ調べるために、首輪や耳に発信機を付けて調査しています。これが、人間の世界でもポピュラーになったときに面白いことが起こると思います。

村井純（慶応大学教授）さんは、自動車にインターネットを載せる価値はこれと似たようなところにあると言います。たとえば、雨が降ってきてワイパーを動かし始めたら、すべての自動車が「ワイパーをどれくらいの速さで動かしている」という情報をデータセンターに報告した瞬間に、各地域の雨の状況がわかる地図がリアルタイムで作れるのです。

つまり、インターネットにつながる自動車がデータを取得するだけでなく、位置情報に加えてワイパーの動きや車速、ブレーキのオンオフなどを情報としてデータセンターに送れば、気象状況だとか、どこからどこまで抜けるのにどれくらい時間がかかるかというのをリアルタイムで捕捉できるようになります。こういった瞬間に、自分自身の存在が役に立つという意味で情報を発信できるものに自動車が変わるかもしれませんが。このようにこれからは、リアルタイムに情報をやり取りすることによって互いに価値を生む状況が、きっといろんな場面で出てくると思います。

☎：ワイヤレスのアクセスラインを使うと言われているスピードネットの現在の状況を教えてくださいませんか？

古川：東京電力のバックボーンを含めて、光ファイバーで通信するのか、東京タワーに中継アンテナを立てて近隣の高層のビルや高速道路までつなぐのかといったいろんなアイデアが出ていて、決定的にこのテクノロジーを使って家庭までのラストワンマイルをつなぐというのはまだ決まっていません。どのテクノロジーが最適なのかということを実験しています。この3か月の間、CDMA方式だとか、2.4Gヘルツの無線を使うワイヤレスLANに近いものだとか、ワ



古川 享（ふるかわ すずむ）  
マイクロソフト株式会社 代表取締役会長。1979年株式会社アスキー入社。同社取締役を経て1986年マイクロソフト株式会社設立、初代代表取締役社長に就任。1991年より現職。

イヤレスの定番として考えられるものが徐々に変わってきています。

実際のサービスでは、単一のテクノロジーで実施しますということを選ばないほうがいいと考えています。テクノロジーを画一化しないで、お客様にいろんなアクセスラインを用意するのはそんなに悪いことではないと思います。CS放送やBS放送をベースとしたプッシュ型の配信メカニズムを使っていく話もあるだろうし、下水道を通ってきた光ファイバーを使うことも考えられます。

☎：最後にワイヤレスも含めてですが、さまざまな機器が「つながる」という状況でマイクロソフトの役割とはどこにあるのでしょうか？

古川：1つは「今までのようなAPIだとかHTML4.0という切り口でコンテンツの記述形式を決めていいのだろうか」ということをもう1回立ち返って考える時期だと思っています。たとえば、オブジェクトモデルを使っているいろいろなものをつないで、データの享受だけではなく、互いの仕事を機器同士で依頼し合わなければならないということです。

昔のやり方では、ウィンドウズ32APIの下でDirectXを使えば互換性があるというのが、マイクロソフトの閉じた互換性でした。しかし、これからのインターネット社会では、ウィンドウズのAPIが持つ意味は、もっと薄いでもかまわないと思っています。場合によっては、たくさんの人の中で決めていくものに対しては、ウィンドウズ

に依存するのはあまりよくないのではと思います。すごく狭い領域で自分自身に都合のいいプラットフォームに引き込むために、一方ではJavaがあって、他方にウィンドウズAPIがあるのは、コンテンツを作っている人にしてみれば「いいかんげんにしてほしい」という話です。ウィンドウズに依存したAPIだとか、サン・マイクロシステムズの意向になかったアプリケーションを書くということは、二重三重にコストがかかるわけで、コンテンツそのものの価値をむしろ優先しなければならぬ時代を考えたときには、新しい時代のAPIができていいと思っています。

機器の相互接続という意味では、家庭の中を見ても、新しいホームバスがIEEE 1394やUSB2といった新しい規格で決まってしまうのではなくて、今までのレガシーシステム、たとえば電話線を通じた接続だとか、電灯線の中で電気製品の制御信号を流すとか、いくつか錯綜すると思います。その中で、ワイヤードでもワイヤレスでも、それが相互につながって、特定の機器に対して何をしたいという意味が自由に行き来できる状態を作りたいのです。こういうことはより前面に出てくる話だと思っています。

ビル・ゲイツがCESで発表した次世代のウィンドウズが果たす役割では、標準化を緩くすることでウィンドウズの世界に留まらず、CPUやOSに依存しなくてもいいという方向が少しずつ見え始めています。

☎：どうもありがとうございました。 ●●



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)